

2021年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 福岡県 】

1 実践テーマ	【 Ⅲ、Ⅴ 】
2 実施対象者	福岡県立早良高等学校 第1学年スポーツコミュニケーションコース 14名 (男子10名、女子4名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (スポーツⅡ) ② 行事名 () ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 () ③
4 目標 (ねらい)	仲間と協力してボッチャに取り組む活動を通して、障がい者スポーツに関する知識・理解を深める。
5 取組内容	アダプテッド・スポーツ学習 (ボッチャ) ① 日時：令和3年11月17日 (水) 13:20～15:00 ② 場所：剣道場 ③ 内容 ・ボッチャのルール等に関する映像視聴 ・リーグ戦【4チームのリーグ、立位、利き手】 ・リーグ戦【4チームのリーグ、座位、逆の手】(※写真) ・感想シートの記入 【写真】 

6 主な成果	①体験のなかで競技特有の楽しさに気付くことができた 運動量が少なく、「障がい者のためのスポーツ」という印象が強いボッチャであるが、生徒たちは決められたルールの中で投げ方を変えたり、戦略を立てたりすることが必要なボッチャの魅力に気付き、楽しみながら活動に取り組んでいた。投げ方を教え合ったり、動画を見て真似をしたりしていくうえで、接戦になる試合が増え、非常に活気のある実践となった。また、生徒が実際に競技するなかで気づいたボッチャの魅力に関する記述が、感想シート内に多くみられた。 以下、感想シートの記述の一部抜粋である。 ・立位や座位など投げ方が変わると、手首の使い方などを工夫しないといけないと思った。最後は接戦になり楽しくなった。 ・ルールは簡単だけど、思ったよりも頭を使う必要があり、奥深いスポーツだった。力加減やコントロールがとても難しく、やりがいのあるスポーツだと感じた。 など ②「障がい者と共に」という視点を獲得できた 感想シートをみると、ボッチャを通じた仲間や相手との交流についての記述があった。「楽しい」というだけでなく、障がいのある人、そうでない人にかかわらず「一緒に楽しめる」という感覚を得た生徒が多かったようである。 以下、感想シートの記述の一部抜粋である。 ・ジャックボールを狙って、どのようにボールを投げるか仲間と話し合うのが楽しかった。これは障がいがある人、そうでない人のどちらとも楽しめるスポーツだなと感じた。 ・利き手から逆手になった時に、投げづらさを感じた。障がい者の方が、投げづらさの中でもボールをコントロールすることはとてもすごいなと思った。 など
7実践において工夫した点 (事業の特色)	条件やルールを変えながらボッチャに取り組ませる 今回は、立位のまま利き手でボールを投げるルールで行った後、椅子に座り利き手でない手でボールを投げるルールに変更した。特に、利き手でない手でボールを投げるという動作において、生徒に「やりづらさ」を与え、障がいの疑似体験とすることをねらった。ルールや条件を少し変え、「やりづらさ」や「難しさ」を与えることで、障がい者スポーツへの理解を深めることができると考える。
8主な課題等	科目体育における「球技」との関連 本校の科目体育において、球技の授業では「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の中から種目を生徒に選択させている。今回はアダプテッド・スポーツ学習の中で体育系コースの生徒にボッチャを体験させたが、一般コースの生徒にもクラスマッチ等の学校行事を通してボッチャを体験させたい。この体験が、運動に親しむための良い教材となることに加え、体育系コース以外の生徒も、障がい者スポーツへの理解を深める機会とすることができるのではないかと考える。
9来年度以降 の実施予定	アダプテッド・スポーツ学習として、ゴールボールを体験する予定。

2021年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 福岡県 】

1 実践テーマ	【 Ⅲ、Ⅴ 】
2 実施対象者	福岡県立早良高等学校 第2学年スポーツコミュニケーションコース 20名 (男子19名、女子1名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (スポーツコミュニケーションコース実習) ② 行事名 () ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 () ③
4 目標 (ねらい)	仲間と協力してゴールボールに取り組む活動を通して、障がい者スポーツに関する知識・理解を深める。
5 取組内容	アダプテッド・スポーツ学習（ゴールボール） ①日時：令和3年11月19日（金） 13:20～15:00 ②場所：体育館 ③内容 ・ゴールボールの概要に関する映像視聴（※写真1） ・視覚情報を遮断した状態での歩行やボールに慣れる活動 ・ゲームのルールおよび進め方の説明 ・リーグ戦（※写真2） ・感想シートの記入 【写真1】 

	【写真2】 
6 主な成果	①実際に体験することで、競技性の高さを実感できた 視覚の情報を遮断した状態で歩行に恐怖心を感じる生徒が多くいる中で、大事な情報となる音（ペアの声掛けなど）が大事だと感じることができた。実際にゴールボールを行うなかでは、視覚情報が一切ない条件下で競い合うことの難しさを感じていた。目隠しをして音を頼りにボールに反応する練習の段階から、「ボールがどっちに転がっているか分からない」「この条件で普通に競技している選手はすごい」などの声が聞こえた。リーグ戦もたいへん盛り上がり、不慣れな条件下で競い合うことを全員で楽しんでいった。 以下、感想シートの記述の一部抜粋である。 ・テレビで見たことあるスポーツだったが、想像以上の難しさだった。音だけの情報で動くのは、とても集中力が必要。 ・ルールだけ聞くと単純だと思っていたけど、実際にやってみるとまったく方向感覚が分からず、奥深さを感じた。 ・どこからボールがくるかわからないだけでなく、どこに投げるべきなのかもわからず、昨年度のボッチャよりも難しさを感じた。 など ②「障がい」について思考する機会となった 感想シートの記述をみると、単にゴールボールを体験しての感想だけでなく、視覚障がいについてや「もし自分にも障がいがあったら」という視点からも感想を記述している生徒がほとんどであった。 以下、感想シートの記述の一部抜粋である。 ・目が不自由な方はたくさんいるので、その人達のことにも考えながら活動することができた。今後の生活にいかしたい。 ・視覚障がいがあってもスポーツをしていることは、とてもすごいなと思った。 ・いまの自分が当たり前ではないと強く感じた。 など
7 実践において工夫した点（事業の特色）	①感染症対策 新型コロナウイルス感染症防止対策の観点から、本来ゴールボールで使用するアイシェードは共用せず、各自で事前に準備したアイマスク等を代用した。 ②安全性の確保と競技難易度の調整 ゴールボールは、障がい者スポーツのなかでも競技性が高く、選手同士の接触やボールとの接触によるケガの発生が考えられるスポーツである。今回の実践では、生徒がより安全に楽しく体験できるよう、本来のゴールボールで使用するボールよりも軽くて小さく、音の鳴り

	やすいブラインドサッカーのボールを使用した。また、競技者の位置を安全面に配慮するため各チームに支指示者をつけて１０カウントのルールをホイッスルでの投球に変更した。 ③競技者以外の配慮 実際に競技を行う前に、実際に競技している人以外の役割について考えさせ、全体で統一の確認を行った。ゴールボールは耳からの情報が大事になるため、特に投球前は不必要な音を発しない。また、競技を盛り上げるために、競技者が必要としていれば攻守時の立ち位置を支持するなど、「する」だけではなく「支える」役割も担った。
８主な課題等	体育理論・スポーツ概論・スポーツ総合演習などとの関連 障がい者スポーツの体験から得られた学びが、一時的なもので終わることがないようにする必要がある。例えば、体育理論や専門科目であるスポーツ概論の学習内容と結び付け、より深い学びに結び付けていきたい。また、スポーツ総合演習で障がい者スポーツに関する課題研究に取り組ませたりすることで、より一層理解が深められるのではないか。
９来年度以降 の実施予定	現段階では特になし